

全国12地域の課題を探究する 学校教育旅行の取り組み

2025.11.21 子ども農山漁村交流プロジェクトセミナー

関東学院中学校高等学校 新堀雄介（横浜市）

自己紹介：新堀 雄介 NIIBORI YUSUKE

横浜市内の中高一貫校で勤務

横浜市立大学都市社会文化研究科観光学修士課程

日本地理学会所属

世界史担当・教務部郊外探究委員会所属

関東学院中学校高等学校

創立**106**年の横浜市南区内大学附属中高一貫校

43人×**6**クラス編成

共学：男女比**2：1**

大学進学率**100%**

関東学院大学進学率**10%**以下

11月に全学年で**1**週間の行事週間を設定

本校の総合的な学習の時間への取り組みの過程

2018年4月から本格始動

2019年4月探究勉強会を有志**9名**で立ち上げ

修学旅行×探究＝U理論+ラーニングジャーニー

2021年QST鯖江・QST上勝をプレ実施

2021～22年「QSTうるま」を高**2**研修旅行で実施

2022年教務部郊外探究委員会**5名**で発足

2022年高**1**企業**SDGs**分析・はまロゲ実施

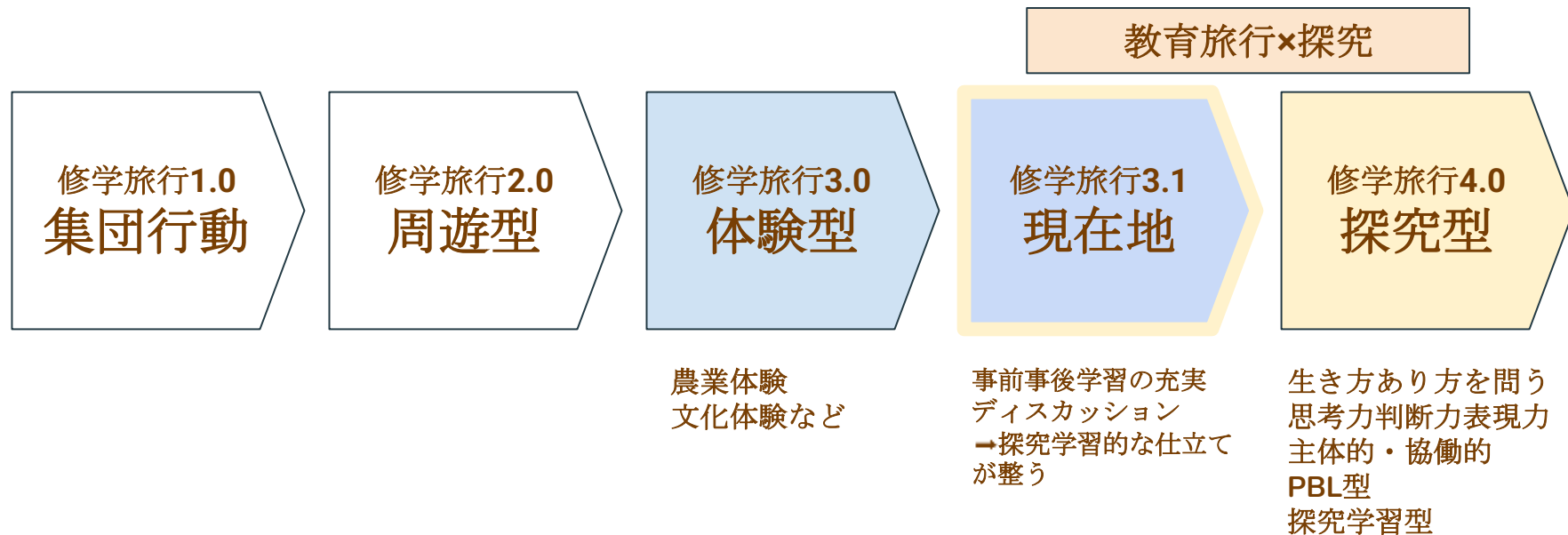
2023～24年「QDJうるま」を実施

2024年QST12方面実施

2024年中1企業**SDGs**・はまロゲ実施

教育旅行を探究的な学びの場
行って終わりではなく、行ってから始める旅

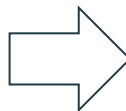
修学旅行の現在地



修学旅行4.0から修学旅行4.2へ

修学旅行4.0

修学旅行4.1



修学旅行4.2

修学旅行の行程に、探究プログラムが組み込まれている

総合的な探究の時間に、
修学旅行が組み込まれている

単独の探究体験学習として
実施

総合的な探究の時間の年間
カリキュラムの一部として
実施

総合的な探究の時間の年間カリキュ
ラムが修学旅行を軸に構築されてい
る

探究プログラムに対する評価
は必ずしも必要なし

探究プログラムに対する評価
が必要

総合的な探究の時間としての評価が必要

「特別活動と探究活動」は親和性が高い

特別活動の目的

旅行・集団宿泊的行事

人間関係形成の力
自己表現の力
社会性と規範意識
実践的な態度

これらの育成を通じて社会生活をより豊かに営み、**将来の社会的役割を果たす力**を身につけることを目的とする

評価の対象にならない

単発の修学旅行では事前事後学習の時間がとれないのが悩み

組み合わせる

違いを意識する

探究活動の目的

総合的な探究の時間

主体的で協働的な学び
論理的思考力
課題発見解決力
表現力と発信力

地域や社会との接点を持ち実践的で現実に即した学びを通じて、これらの学びの意義を実感し自己実現や社会貢献に向かう力を育むことを目的とする

評価の対象になる

事前学習・事後学習こそ探究学習

教育旅行

地域人材から学ぶ

地域課題への関心

2つの探究活動

PBL型探究

【特徴】

成果物（プロジェクト）重視の学び方

現実社会の課題をテーマに、チームで協働しながら課題解決に取り組む。

学習のゴールは「解決策の提案」や「具体的なアウトプット（発表・制作物）」に置かれる。

【目的】

社会での実践力・協働力・プレゼン力を育てる。

課題解決プロセスを通じて、学んだ知識を社会的文脈で活用できる力を養う。

探究学習型探究

【特徴】

問い（Why? / How?）から始まる思考重視の学び方

生徒自身が関心を持ったテーマについて、自ら問いを立て、情報を集め、考察し、結論を導く。

ゴールは「知的理解の深化」や「価値観・視点の変容」。

【目的】

主体的に学ぶ姿勢と、論理的・批判的思考力を養う。

自分なりの「問い」を軸に、学問的アプローチで深く掘り下げる力を育てる。

「体験」を「探究」にする→異空間体験で対話する

認知分野におけるBloomのタクソノミーの6つのレベルと具体例



探究プログラム
「探究」は“なぜ・どうして”を考え、“自分の問いを立てる”段階

体験プログラム
「体験」は“やってみる”こと自体が目的

体験のフェーズ：知識・理解・応用

体験フェーズ（事前学習～初日夜）

段階	目的	活動例	対応時期
① 知識（記憶）	地域やテーマに関する基礎情報を得て、現地理解の土台をつくる。	資料・動画・地図などで地域を調べ、現地での問いを設定する。	事前学習（地域研究）
② 理解	得た情報の意味を自分の言葉で整理し、グループで共有して理解を深める。	「なぜこの地域を訪れるのか」「自分たちは何を学びたいのか」を話し合い、マインドマップや目的カードを作成する。	事前学習～出発前
③ 応用（行動＋内省）	現地での体験を通して知識を行動に移し、体験の意味を内省しながら探究へつなげる。	地域人材へのインタビュー、作業体験、観察、フォトボイス記録などを行う。夜には「ナイトリフレクション」で一日の体験を振り返り、印象的な場面や心の動きを共有。その後、グループで「問いの再設定ワーク」を行い、翌日の目的（次に何を確かめたいか・誰に会いたいのか）を明確にする。	2泊3日 初日午後～夜

探究のフェーズ 分析・評価・創造

探究フェーズ (2日目～事後学習)

段階	目的	活動例	対応時期
④ 分析	体験を振り返り、出来事の背景や構造を多角的に捉える。	グループで体験内容を整理し、「なぜそうなっているのか」を考察する。	2日目午前・午後
⑤ 評価	他者や自分の視点を比較し、学びの価値や意味を見出す。	他グループとの共有・発表を通じて、地域や自分の成長を再評価する。	最終日午前
⑥ 創造	学びをもとに、新たな視点や行動を生み出し、地域との関係を再構築する。	「関係人口」として地域にどう関わるかを考え、アクションプランを作成する。	事後学習 (振り返り・発表)

探究プロセスモデル

事前知識 → ②体験 → ③内省 → ④問いの再設定 → ⑤分析 → ⑥再構成 → ⑦発表・共有

体験を“素材”にする

→ 体験は目的ではなく、思考を深める素材。

問いを“上位化”する

→ 「どうだった？」ではなく「なぜ？どうすれば？」へ。

他者との対話を“構造化”する

→ 他者と比較・共有・再構成する場面を必ず設ける。

他者とは「自分を揺さぶるすべての存在」

地域との対話

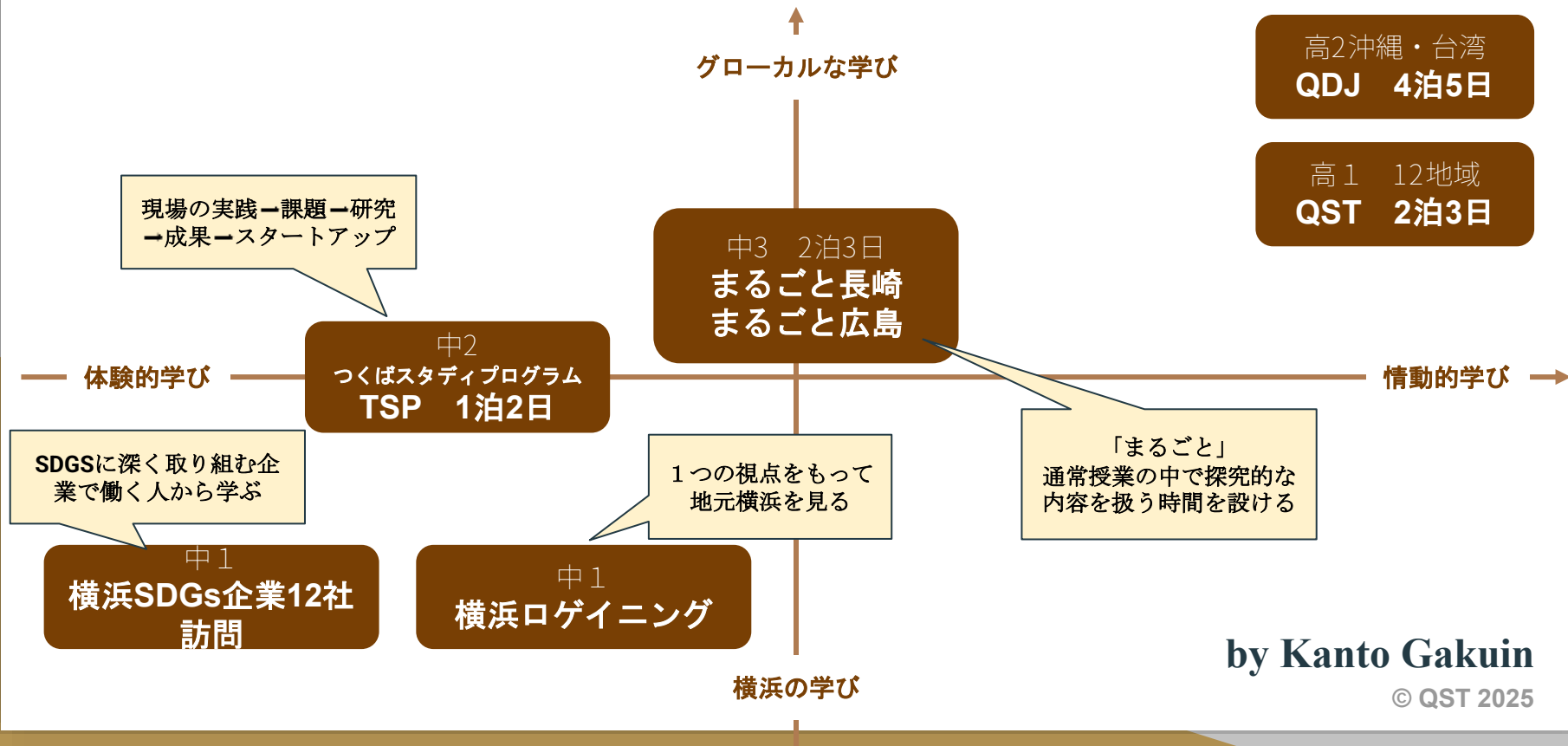
QSTにおけるSELの焦点

- ・ 地域への共感・地域人材への共感を育む。
- ・ 自分の先入観を手放し、現地での出会いから新しい価値観に気づく。
- ・ 「どう思ったか」よりも「どう感じたか」に焦点を当てる。
- ・ 地域と横浜の違いを、生活だけでなく考え方・生き方・在り方まで掘り下げて考える。

QST 「探究のデザイン」

Question Story Transformation

中1～高3まで6年間のプログラムデザイン



中学校・高校3年間の探究活動2025

中学1年生

7月横浜SDGs企業訪問
11月横浜ロゲイニング

視点を持って地元を観察する

中学2年生

7月アントレプレナー
11月「実践と研究」
つくばスタディツアー

研究の意義を知る

中学3年生

7月on-lineで様々な人
に出会う
11月まるごと広島
まるごと長崎

訪問地をまるごと学習する

育成したい生徒像

やったことのないことを
やりたがる人

高校1年生

QST
Question Story
Transformation

課題を追及している人に課題
の現場で会う

高校2年生

QDJ
Question Design
Journey

自分の問いを手に入れる

研究計画書のレジメ

追求する道すじを考える

育成したい生徒像

やりたいことを追求する人

高1 QST2025

北海道恵庭市
産業ロボット

北海道帯広市
新しい農業

北海道浦幌町
新しい農業

秋田県五城目町
地域医療

岩手県陸前高田市
震災復興

福井県鯖江市
伝統工芸・女性活躍

宮城県鳴子温泉
エコラの森で環境教育

Ques

岡山県真庭市
バイオマス発電

Str

Transformation

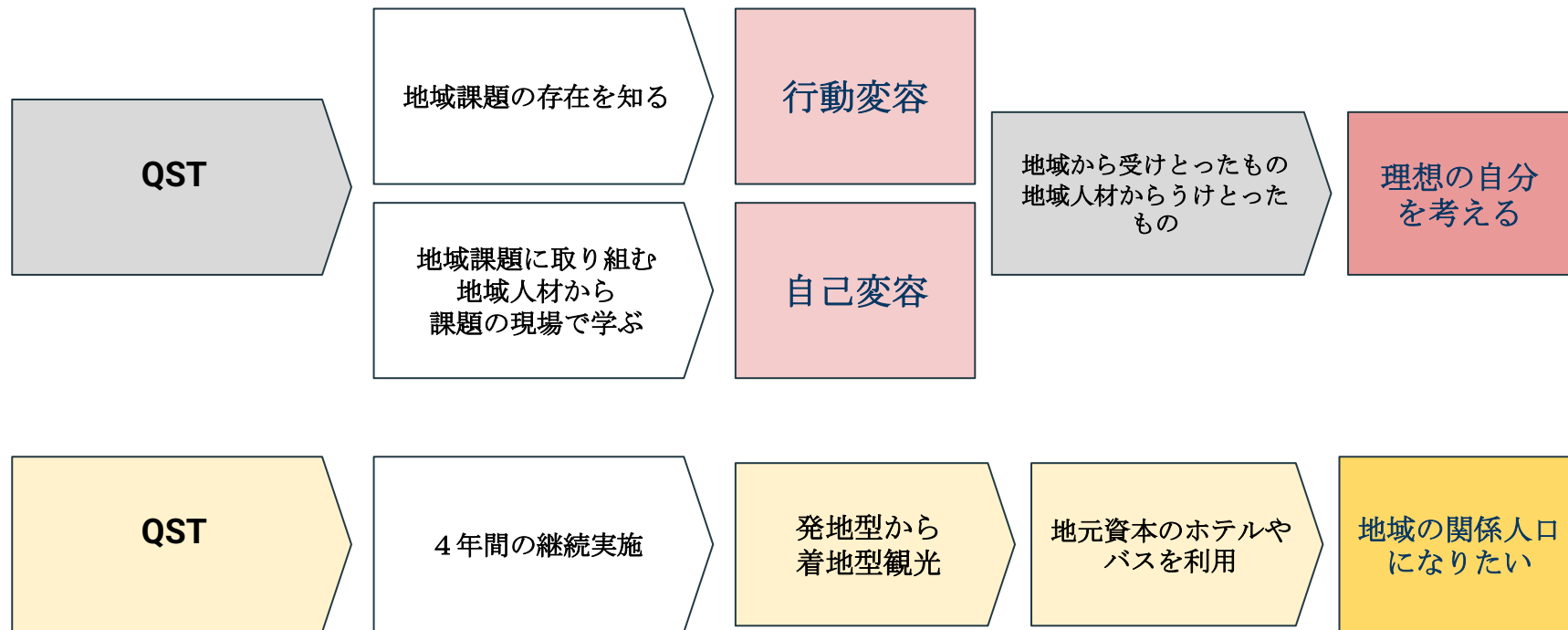
群馬県みなかみ町

長崎県壱岐市
イルカパーク
ドローン活用

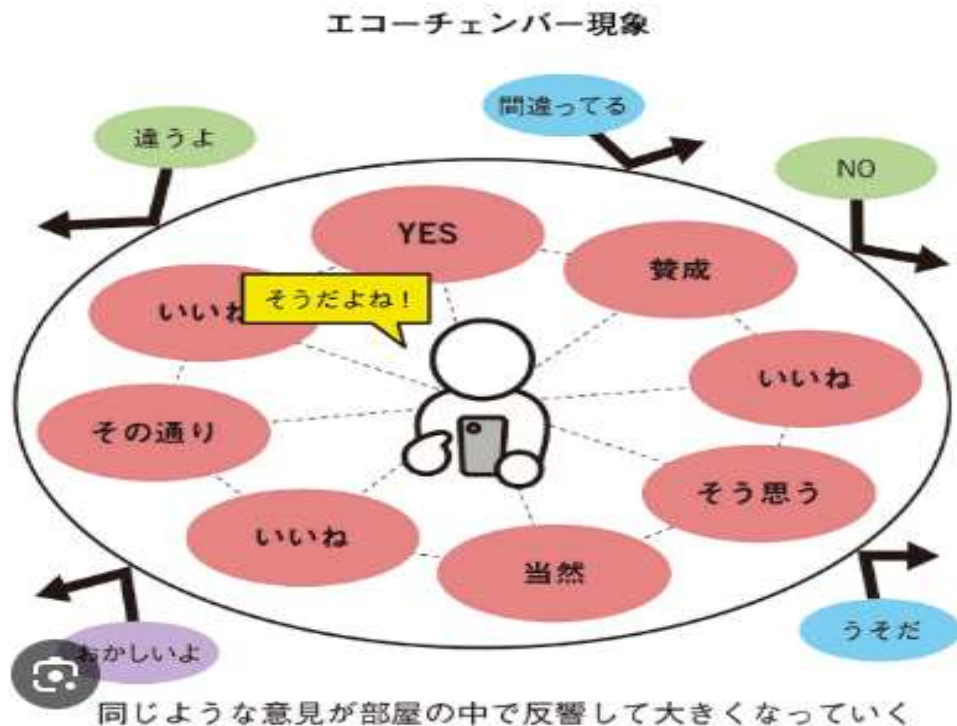
徳島県上勝町
ゼロウェイストの先

長野県小布施町
地域再生

QSTの目的とゴール

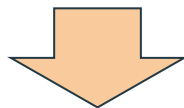


目的：QSTで高校生をフィルターバブルから連れ出そう

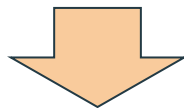


多くの高校生はスマホの中で生きています。

自分の興味がある情報しか手にすることはありません。

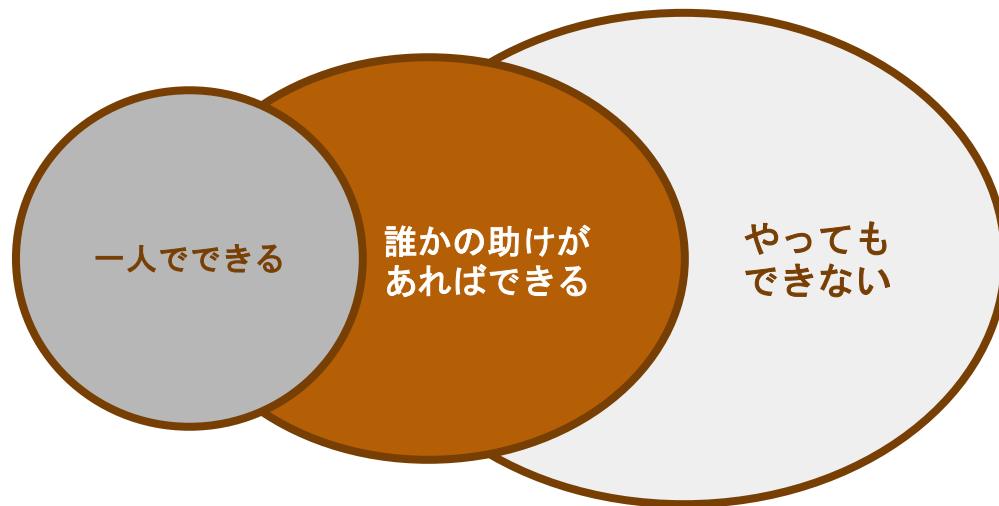


したがって、自分が「やりたいこと」「考えたいこと」を見つけるには、彼らを包んでいる「フィルターバブル」から連れ出す必要があります



QST「旅する学び」

目的：QSTが狙う「発達の最近接領域」

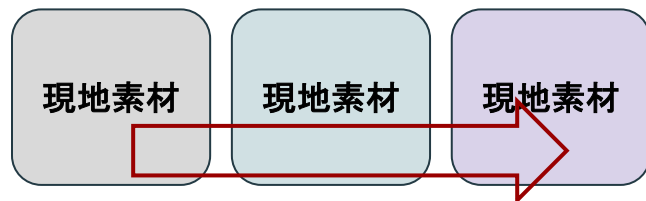


地域に入って、地域の方々との対話や体験があることで、生徒は成長できる

QSTの作り方

目的	内容・意図	作り方
地域課題の存在を知る地域人材から学ぶ	人を観光資源にする	熱量をもっている人との繋がりから探す 社会課題から探す
完全着地型観光	学校プログラムとして実施する	地元旅行会社から情報を得る
関係人口になる	事前学習で地域研究 初日午後に地域観察 発表会場を工夫 地元資本の企業を使う	4年間は継続する 発表会場を選ぶ 足で探す また来たね！と言われたい

プログラム造成 並列型から垂直型へ



体験・観光の寄せ集め

- ① 再エネ利用トマト農家で収穫体験
- ② バイオマス発電施設見学と講話
- ③ 太陽光発電施設視察と講話
- ④ 体験から学んだことを発表する



文脈に沿った体験

- ① 震災遺構視察と講話
- ② バイオマス発電施設見学と講話
- ③ 都市と地方再エネとの関係を行政と対話
- ④ これからの都市と地方の関係を考える

QSTは、生徒と地域の双方に変容をもたらし、 地域内外のつながりを生み出す共創型の学び

QSTがもたらす変化

→QSTは生徒の変容を促すだけでなく、
地域にも新しい変化を生み出している。

→地域の中で新たなつながりが生まれ、
住民や地域人材同士の協働が広がる。

→地域と地域がつながることで、学びと
交流の連鎖が広がっている。

QSTは、従来のように観光資源を並列的に配置する旅行ではなく、1つのテーマに沿って縦列的に構成することで、地域に新たな「つながり」を生み出す可能性

→並列型（既存の素材型）では「点的接触」にとどまり、地域の内的関係性は生まれにくい。

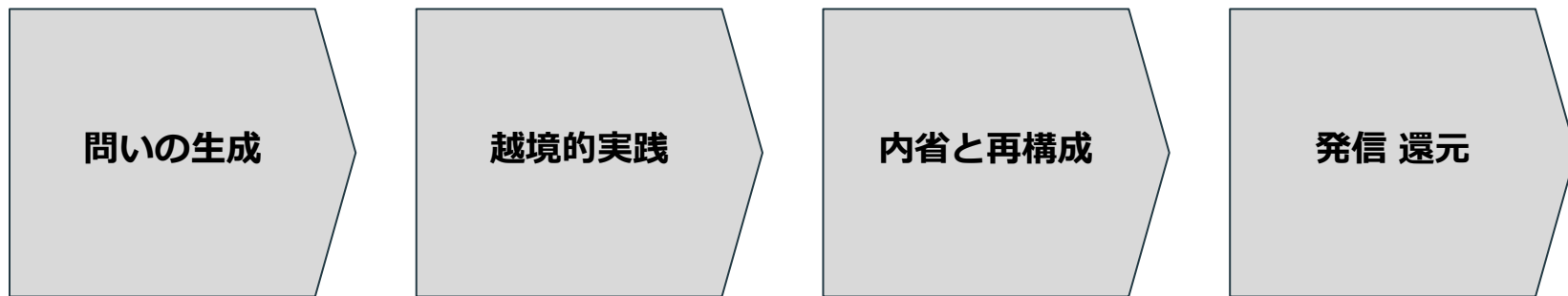
→一方、縦列型（探究テーマ型）では、地域人材同士の協働・再発見が促され、生徒と地域の双方に変容が生じる。

→この構造的違いが、「民泊」「QST」が地域に変容をもたらし可能性に繋がる？

QST 実施までのスケジュール

修学旅行4.2として35時間分の総合的な探究の時間の授業として実施

探究のデザインモデル（荻宿俊文）



探究は「終わる」ものではなく、「次の問いを生み出す」循環である。
荻宿俊文『越境する探究学習』（明石書店, 2021）

QST2025のスケジュール（35時間分に相当）



QST2泊3日の行程表・事前事後学習内容

事前学習	11月QST			帰着後
		AM	PM	
修養会SEL 地域人材との顔合わせ 地域研究 インタビュー調査 チームビルディング	1日目	移動	地域観察③	11月 各地活動の共有 フォトボイスプレ ゼンテーション
	2日目	課題の現場体験 ③	地域人材との ディスカッション ③	12月 関係人口になるために 何を考え、どう行動す るか？
	3日目	地域人材との対話 発表②	移動 壁打ち君	
				地域人材がZOOMで 参加 振り返りを強化する

参考：「探究のための行動指針18」

1. 常に問いを立て、学びの原点を自分でつくろう
2. 相手の声に耳を傾け、共感から関係を築こう
3. 自ら行動し、変化を起こす当事者になろう
4. 失敗を恐れず、挑戦から学びを得よう
5. 現地・現場で見て感じたことを学びの中心に置こう
6. 多様な価値観を受け入れ、違いを強みに変えよう
7. グループでの対話を大切にし、学びを広げよう
8. 表面的な言葉にとどまらず、背景や文脈を探ろう
9. 自分の言葉で語り、自分の責任で学ぼう
10. 一人ひとりの感情と気づきを大切にしよう
11. スピードよりも“本質”を見抜く力を磨こう
12. 誰かの“正しさ”に流されず、自分の頭で考えよう
13. 事例にとらわれず、目の前の課題に応じて考えよう
14. リーダーシップより“支え合い”を意識しよう
15. 発見や学びは記録し、共有の財産にしよう
16. 他者の視点から自分の考えを問い直そう
17. 学びを社会や未来に還元する意志を持とう
18. 探究の旅は“自分の人生観”を広げる時間にしよう

18の行動指針

自己紹介名刺に記入

選んだ理由

意識する場面
その際の行動

現地発表事例

QST2024

現地発表 フォトボイスプレゼンテーション



宝の山

工場でベルトコンベアに乗って流れてくる大量の木片を目にしたとき、背丈を超えるほど積み上がったそれらが本来は廃棄されていたと聞き、大きな衝撃を受けた。まだ使える木が「不要」とされている現実、温暖化や環境破壊の本質的な問題が自分の目の前にあることを実感した。

この体験を通して、社会の「便利さ」の裏には大量の廃棄という構造があることに気づかされた。今後は、自分自身の生活の中でも「使い捨てる」のではなく、「使い切る」意識を持ち、環境への責任を自分ごととして考えていきたいと思う。



森の中での枝打ちの経験や地域の人の話を通して、大場さんがいなくなった後の100年200年先の森をどうしたいかということが理解できました。気を余すことなく使い、CO2を0にするという未来は達成するのが難しいと思いますが、今までの2日間で大場さんの森に対する熱量が伝わってきました。来る前までは森に入ることがいやで不安でしたが、枝をきったあとの太陽の光が差し込んだ森を見て感動し、達成感がありました。また、みちさんの話の中で高校卒業後宮城から出て海外に留学した、そこでの経験と鳴子地域の取り組み共通点が見えてきて今まで取り組みを続けていると聞き、きっかけは体験だなと感じました。

鯖江 土直漆器の製造過程



土直漆器の製造現場を見学し、少しでもほころがつくと最初からやり直すという話に驚きました。一本のお箸にも滑り止めを丁寧に塗り、お茶碗の底まで美しく仕上げる姿から、ものづくりへの強い誇りを感じました。効率よりも丁寧さを大切にする姿勢は、これからの私の行動にも通じると思いました。今後は、どんなことでも途中を省略せず、最後まで丁寧に取り組むことで、責任と誇りをもっていろいろなことに臨みたいです。

QST2025 地域人材紹介

QSTのコンセプト

自己変容

自分を変える



行動変容

行動を変える



関係人口

また帰る



北海道恵庭市 ロボットを活用した新しい農業



北海道恵庭市では、北海道ハイテクノロジー専門学校の渥美教授と出会い、ロボットを活用した未来型農業に触れます。地域農業の課題にテクノロジーで挑む研究者の熱意にふれ、次世代の働き方や持続可能な社会について考える機会となります。

北海道十勝帯広 食料自給率1400%



北海道十勝では、食料自給率1400%を支える酪農家や農家の皆さんと出会い、「食の絆」をテーマに学びます。自然と向き合い、地域や家族と支え合いながら食を届ける姿から、命をつなぐ仕事の尊さと、人と人とのつながりの大切さを感じ取ります。

北海道浦幌町 世界に羽ばたく「うらほろスタイル」



北海道浦幌町では、地域の人・地域への思いを育てる「うらほろスタイル」に取り組む近江さんと出会います。子どもから大人までが地域の未来を語り合う場づくりを進める近江さんの姿から、関わり続けたいくなる地域の在り方を学びます。

秋田県五城目町 地域医療と社会福祉



秋田県五城目町では、社会福祉に取り組む八嶋さんと地域医療を支える医師と出会います。高齢化が進む中で、「誰も取り残さない町づくり」を目指す二人の連携から、福祉と医療がつながる地域の支え合いのかたちを学びます。

宮城県鳴子温泉町 100年の森づくり



宮城県鳴子温泉では、「エコラの森」で環境教育に取り組む木こりと出会います。100年後の森を考え、自然と共に生きる知恵や技を学び、森林と人のつながり、持続可能な暮らしについて考える体験が待っています。

岩手県陸前高田市 震災復興



陸前高田市では、東日本大震災の経験を復興やまちづくりに生かそうと取り組む人々と出会います。命の尊さや助け合いの力を語り継ぐ中からうまれた人とのつながりが未来への希望・防災・共生・地域の絆について深く学びます。

福井県鯖江市 女性活躍と伝統工芸



島根県浜田市では、「市長をやりませんか？」の企画を続ける竹部さん、女子高生が市政に提案するJK課、伝統工芸を受け継ぐ女性たちと出会います。地域に関わる多様な担い手の姿から、自分ごととして社会に関わる面白さと可能性を学びます。

群馬県みなかみ町 地域観光



群馬県みなかみ町では、観光の枠を超えて地域の「人」に光を当てる実践者と出会います。旅行会社勤務を経て地域に移住し、観光関係者でない人々を主役に据えた学校旅行や地域学習をコーディネートする姿から、観光を通じたまちづくりと「人が資源になる」地域の可能性を学びます。

長野県小布施町 若者の街づくり



若者会議で街づくりの方法を提案した小布施町長市村良三さんの死後、彼の思いを受け継いで小布施を盛り上げている方々から、当時の熱量を受け取りに行きます。

徳島県上勝町 ゼロウェイストとその先



徳島県上勝町では、日本初の「ゼロ・ウェイスト宣言」を掲げ、ごみを出さない暮らしを実践する町を訪れます。分別45種類・リサイクル率80%超の取り組みに加え、その先を模索する若者たちの挑戦にも出会い、持続可能な未来を自分ごととして考えるきっかけを得ます。

岡山県真庭市 木材利用と街づくり



岡山県真庭市では、バイオマス発電で市の約60%の電力を賄う先進的な取り組みに触れます。地域資源を活かしたエネルギー循環のまちを支える「真庭人」と出会い、人と人とのつながりを育む仕組みや、地域全体で持続可能な未来をつくる実践から学びます。

長崎県壱岐市 イルカパコミュニケーション・ドローン活用



長崎県壱岐市では、大手広告代理店から移住しイルカパークを再生した若者や、ドローンを活用して新たな農業に挑む移住者と出会います。民宿に泊まり、島の日常にふれながら、壱岐の自然・文化・人の想いに触れ、コミュニケーションについて考えるとともに、自分らしい地域との関わり方を考えます。

Question

Design

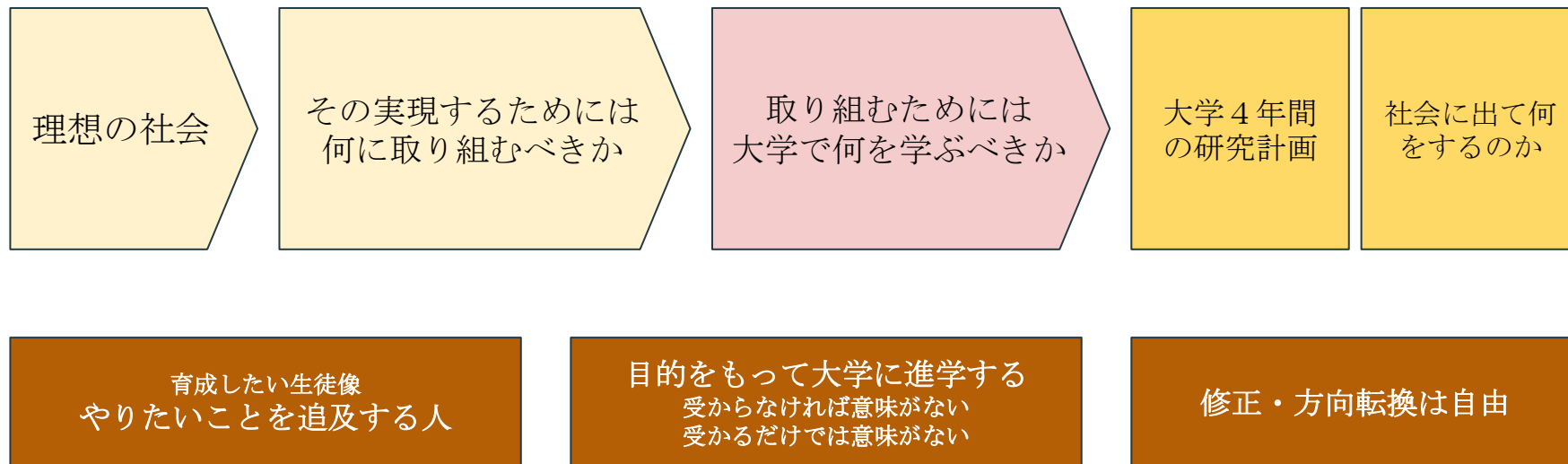
Journey

QDJ沖縄・台湾 「自分の問い」をつかむ旅

ゴールは「研究計画書」の作成→総合型選抜入試「志望理由書」作成

ギモン（何気ない問い）→問い（調べて生まれる問い）→自分の問い
（自分を掴んで話さない問い）→リサーチクエスチョン（仮説を伴う
検証可能な問い）

高校2年生：QDJのゴールと育成したい生徒像の過程



QDJ 理想の社会から自分の問いを考える

7月事前学習

問い作りの練習

地域研究

チームビルディング

11月QST

沖縄方面2022～
うるま市地域人材
沖縄式円卓会議

台湾方面2023～
台南：成功大学
台北：地域人材

対馬韓国方面（2026～）
歴史風土
漁業
海洋ごみ

地域人材と「理想の社会」を考える
そこから「自分の問い」を立ち上げる

12月発表活動

リサーチクエストと
仮説を考える

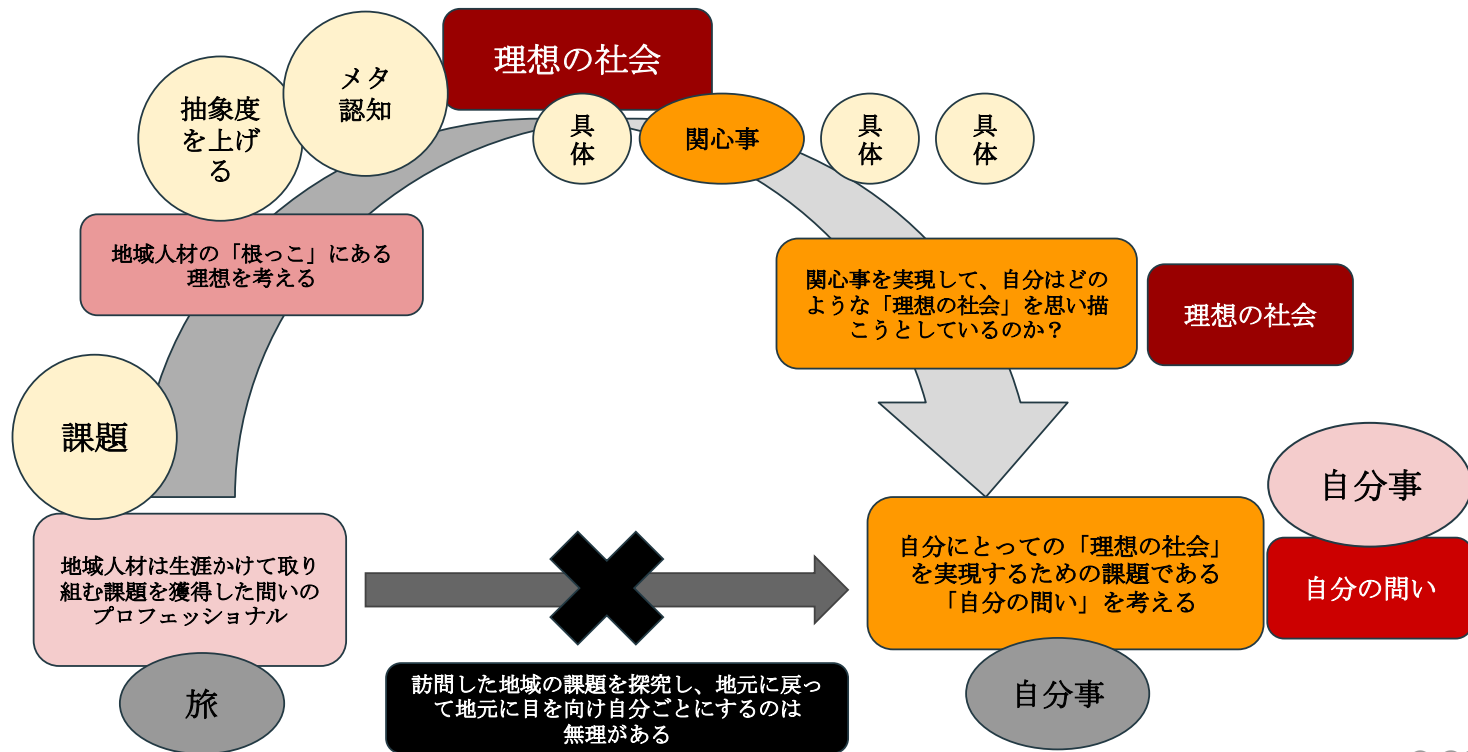
研究計画書作成

2月中学入試期間

志望理由書の研究計画
作成

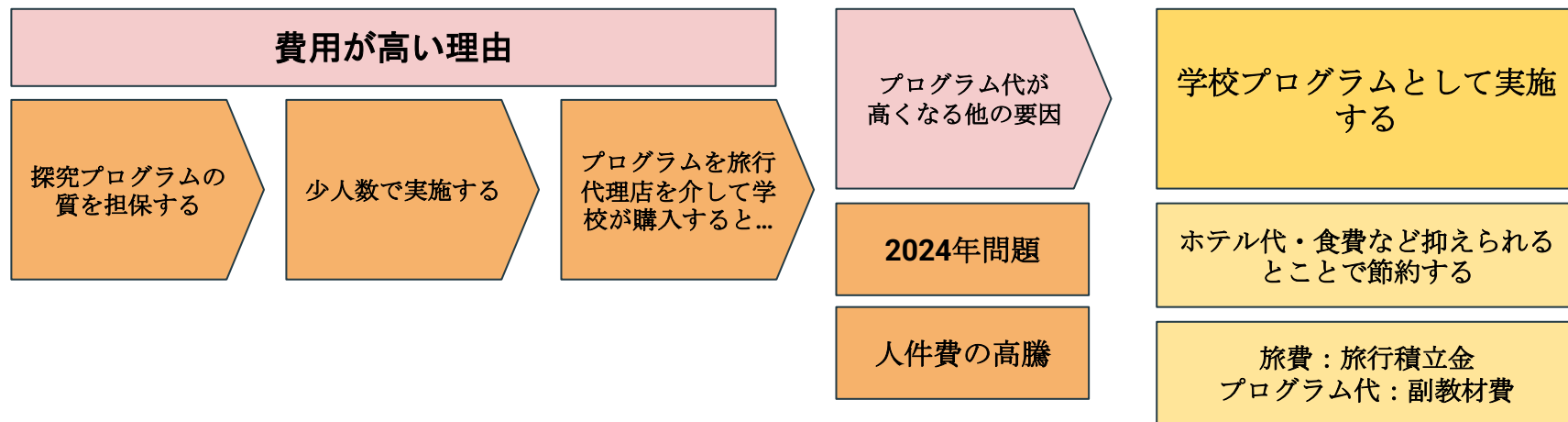
QDJにおける「自分の問い」の作り方

「理想の社会」から「自分の問い」へ

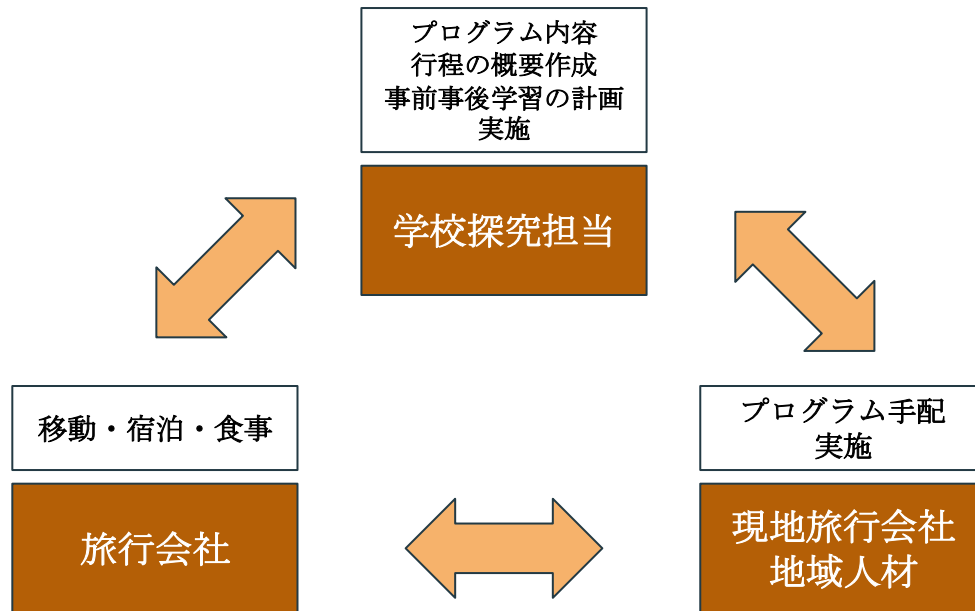


QSTの課題

課題：費用が高い 2泊3日で総額9万円前後



課題：学校と外部との役割分担



課題：校内（学年と探究担当）の役割分担とオペレーション

特別活動として

学年の業務

部屋割り
諸注意
しおりの作成
現地での写真の手配
事前事後学習実施
引率等実務
旅費の会計報告（旅行積立金）

探究の授業として

探究担当の業務

プログラム設計運営
事前事後学習の設計教材化・運営
旅行行程調整
生徒の希望調査
プログラム費会計（副教材費）
報告書作成

課題：振り返り・評価をどうする？

体験学習を実施

体験しただけ？

体験を学びに変え
たい

リフレクションが
大切

旅先で振り返りを行う
ファシリテーターがない

表面的な振り返りで
終わってしまう

一般的には、そもそも修学旅行
を振り返る時間がない

担任が生徒が書いた振り返りを
深めるための指導をする時間
がない

総合的な探究の時間の授業として
実施するなら「評価」をどうす
ればよい？

そもそも探究活動に対
する評価をどう出せば
よいのか？

壁打ち君でリフレクションを深める

アプリが「壁打ち」相手になる？



「旅を通じた探究学習」支援アプリ

「Bloomのタキソノミ」と「Mezirowの変容的学習理論」を活用。修学旅行に特化した振り返りツール。

生徒がAIとの壁打ちを通じて自分の体験を深ぼりする

壁打ち後に書いた200字の文章をAIが三段階評価する

壁打ち後に書いた生徒に今後の学びをサポートするコメントを提示

ルーブリック評価例

例：壁打ち君への入力テキスト（例）

「修学旅行で広島平和記念公園を訪れ、戦争の悲惨さを学びました。原爆ドームや資料館を見学し、被爆者の体験談を聞くことで、実際に起こった出来事の重みを感じました。特に、戦争が人々の生活や未来に与えた影響について考えさせられました。この経験を通して、平和の大切さを深く理解し、今後は身近な平和活動に積極的に参加し、周囲の人々にも伝えていきたいと思いました。」

評価項目	内容	スコア
タキシノミーレベル	平和活動への行動変容が示され、「評価」「創造」レベル	3
論理構成レベル	訪問→体験→学び→行動と構成が明確	3
主体性・内省レベル	自分の行動変容（平和活動への参加）が示されている	3
合計スコア	9点（9/9点）＝高次思考レベル	9（A評価）

壁打ち君からのアドバイス：応用的思考を強化するには？

→「なぜそれが重要なのか」など原因と影響を深めると、思考の広がりや探究性が高まります。



ご清聴ありがとうございました

新堀 雄介

niibori.y@kantogakuin.ed.jp

045-231-1001

08025509083

